

DIALOGUE ON DEVELOPMENT—V (インド)

開発のための対話——相違点を越えた パートナーシップ



(1月4日～11日)

・開会式で講演するエジプト大使

インドのパンチガーニにあるMRAセンター「アジアプラトール」で、一月四日～十一日に国際会議「開発のための対話—相違点を越えたパートナーシップ」が開かれました。開発途上国の将来や明日の世界のあり方について考えるこの会議には十ヶ国の代表が集まり、ボンベイ駐在の米田清領事、相馬雪香、藤田幸久各氏の参加もありました。宗教・人種・階層間の対立、貧富の差というすでに存在する問題に加えて、最近では痛ましいニュースの多いインドですが、和解と再建のために勇気をもって努力する人々からの報告があいつぎました。エジプト大使は、アジアプラトールを評して、「出合いと自由な話し合いの場を提供し、平和のために大きく貢献している」と述べられました。



・インドから貧困を追放するためには、文盲をなくして土地を分配する必要があると訴えるハリジャンの道路工夫 (左)

世界の動き

〈スイス〉……昨年末から新年にかけてコーで開かれた冬の世界大会に、ジュネーブ駐在の千葉一夫大使が出席。

「世界でおこった事件の後始末をする職業がら悲観論者になりがちですが、ここで人間の精神の高潔さと、世界の未来をになう若者たちの姿にふれて大いに勇気づけられました。」と述べられた。

〈エルサルバドル〉……戦火の続くエルサルバドルで昨年十一月、「平和——一人ひとりの責任のもとに」というテーマで三日間の円卓会議が開かれ、欧米諸国から六十名が参加。案内状に感動したドアルテ大統領から、「憎悪と暴力で分裂するこの国に平和をもたらすのは愛と寛容の精神です。道義的・精神的なものの復活を訴え続けて下さい。」との激励をうけた。会議では、「家庭で、職場で一人ひとりが平和への努力をしていくこと」の必要性が強調された。

〈インド〉……インドのパンチガーンにあるMRAセンター「アジアプラトー」で毎月開かれる産業人会議での最近の発言から

「この会議に参加した部下たち

は、正味二時間ぐらいしか働かずにおしやべりばかりしていた働きぶりをすっかりあらため、恒例になっていた工場閉鎖も見られなくなりしました。ここパンチガーンで「他の人たちを育て幸せにする生き方」を学んだ私も、部下にきまりきった仕事を与えるだけのやり方を改め、設計の技術をすすんで教えていくつもりです。」

(プーナのエンジニア)

〈イギリス〉……社会の不平等と貧困の根絶を訴えて、鉱山労働者からイギリスの労働党の創始者となったケア・ハーデイの一生を描いたビデオを製作。現在は、人種問題をかかえて緊張状態にある学校を舞台にして、人種・階級間や家庭における対立の解決法をさぐる劇「クラッシュポイント(衝突点)」のビデオ化も進行中。

〈アメリカ〉……六月十五日〜二十三日まで、ワシントンのジョージ・タウン大学で開催される国際会議のテーマは、「相違点を乗りこえた世界づくり」。指導者層にも一般の人たちにも、中南米をはじめとした世界の問題に心を開いて、改めて国のあり方を考えてもらおうのがねらい。

日本の動き

●二月二十二日(金)、第二回の通常総会にひきつづき、滝田実氏(同盟顧問・ゼンセン同盟名誉会長)の文化講演会「先進国病を考える」が開かれ、日本は正念場をむかえつつある。勤労意欲を失い、自分のことばかり考えて生きがいや享樂的なものにおくか、世界のことも考えられるようになるかが、日本が先進国病にかかるか否かの境目である。世界の二大問題は、先進諸国の『失業』と、

開発途上国の『貧困』であり、その答は世界的規模の軍縮しかない。この点、日本のはたすべき役割は大きい。」という滝田氏のお話は、聴衆に強く訴えかけました。●バザーを三月十六日(土)に開催。小田原会議をはじめ、五月の一連のキャンペーンに海外から参加する若い人たちの旅費づくりのためにおこなわれた今回のバザーは、婦人会と近所の方がたの協力をえて、短時間に予想以上の収益をあげました。次のバザーは十一月の予定です。ありがとうございました。



誰もが
他人が変わることを
望んでいます



どの国も
他国が変わることを
願っています



けれども人はみな
あいてが先に始めるのを
まっています



混乱する世界のために解決法をみつけたければ
1番の近道はまずはあなたが始めること
(そしてあなたの国が)

エッ、



ぼくが?

豊かさの中で 求められるもの

大木 浩史

私は、インドやオーストラリアでのスタディコースをはじめとするMRAの諸活動に参加した約二年間の旅を終え、昨年の十二月に帰国いたしました。

インドのパンチガーニでの国際会議、センターの農場でインドの農夫と一緒に働いた日々、ダライ・ラマにお会いできたこと、セミナーや若い人を対象にしたトレーニングコース、それにキャラバンを使ってオーストラリア大陸を走りまわったキャンペーン「キャラバン・キャブレードウ」と、それぞれどれをとっても生涯忘れることのできない貴重な体験をいたしました。

思えば長いようで短かったこの二年間に一番考えさせられ、今なお考えていることは「本物とは何か、どのようにしてそれを見つけることができるのか」ということです。

高度成長をなしとげ経済大国といわれる日本は、物質面では過去の時代とは比べものにならないほど豊かになりました。また雑誌をはじめ出

版物の増加によって、いったいどれを真実として受けとめて良いのかわからないほど情報が氾濫しています。「本物」や「人間が本当になすべきこと」を見い出せないことが原因となつて、悲しいことに家庭内暴力や校内暴力事件が後をたたないことも事実のようです。

クリスマスチャンでもない私ですが、ある日曜に教会を訪ねて一番後ろの席にすわっていると、牧師さんが「本物を見つけるのはとても大変なことだ」ということを、面白い例を一つあげて説明していました。それは有名なチャーリー・チャップリンの実話だそうです。

チャップリンがナチス・ドイツから圧迫を受けてイギリスでは仕事ができなくなり、アメリカに渡つて間もないころ、街で一枚のポスターを目にしました。「チャップリンの物まね大会——優勝者には賞金百ドル」これはおもしろいと思つた彼は、さっそく参加することにしました。チャップリンは自分の衣装を身につけ化粧をし、自分自身を演じました。けれども上位入賞はしたものの、優勝するとはできませんでした。

本物や真実が実際には中々ありに、あるいは目の前にあつても気がつかずに見逃してしまうことが、日常生活ではよくあります。

「ガイダンス」(天に聴くことによつて得られる、今何をなすべきかという啓示)というものが、この本物を求めていくうえで最良の方法であると感じたのもこの二年間でした。MRAのことや四つの絶対標準(絶対正直・純潔・無私・愛)についても以前からよく知っていたつもりでしたが、何もやれていなかったと思ひました。

オーストラリアでのキャンペーン中、一人の人の「ガイダンス」がこの国最大の問題に光明を与えたのを見ました。その難問とは、原住民アボリジニーから奪つた領土返還問題です。建国二百年ぐらいたつていない新しい国ですが、地下資源を開発し広大な農地を求める欧米系白人と、近代文明になじめないで伝統的な生活を維持するために土地の返還を求めているアボリジニーとの対立は、深刻な政治問題となつています。しかしながら、お互いが心を開いて話し合う場が全くないのが現状です。

このことに気づいたある夫婦は、自分たちでなにかできることはない

かと考え、教会と一緒に礼拝できるように、また地域のアボリジニーのリーダーとの交流を深めるように真険に考え努力を始めていました。このような人たちを見てみると、私たちの身边にも今すぐやるべきことがたくさんあるように思えてきます。

私はこの四月にある会社就職、一人の社会人として新しいスタートをきりました。仕事のなかで、あるいはまた日常生活の中で、さまざまな困難に直面することもあるでしょう。その中で本物を探し求めるといふ点においては、ひよっとすると一生かかってもやりとげることができないかもしれないかもしれません。また私一人ではなしうることは少ないかもしれませんが、皆さん方と力を合わせてよい良い明日のために努力を続けていきたいと思ひます。



ガイドンス・6

MRAの創始者ブックマン博士は、古くからある真理に新しいころもをきせ、複雑な概念を誰にでも理解できるようにわかりやすくする才能の持ちぬしであった。むずかしい理論より一つの実践を、と言いつづけた博士は、自らの体験をおして確固とした信念、神にたいするゆるぎない信仰をもっておられた。「人が聴く時、神は語る。人が従う時（そのことばに）神は働く。人が変われば、国は変わる。」「受信機さえ整備すれば、誰でも神の声を聴くことができる。」これが博士の信念であり、体験であった。そしてこのことばは、信仰をもった人々にも、無信仰の人にもあてはまると断言されたことは、まさに現代にふさわしい洞察力であると言えよう。（神ということばに抵抗をおぼえる人は、心・天・良心の声などおきかえている。）

平和を望まない人はいないのに、局地戦争はあとをたたないうえ、戦争を防止するためといながら、おそろしい勢いでエスカレートしている軍拡の現状を、博士はなんと言われるだろう。

「私たちは平和を求めるが、平和の代価を払ってはいない。」本当に平和を求めるなら、それに答えられるような生き方をせよ、と博士はせまる。「今日の危機は道義的なもの」で、「すべての問題の根源は、人の心に巣くっているおそれ、憎しみ、貪欲、そして利己主義ではないだろうか」と問いかける。さらに「私たちは自由を口にするが、利己心の奴隷になっている。」と指摘される。

自分のなかの利己心、憎しみ、おそれをみきわめることは容易なことではない。MRAは自分のなかの誤りを照らしだすただてとして四つものさし、絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛の標準を提供する。

まず自分を知ること、分かたら立ちどまらないで先にお進みなさい、と博士はいう。先に進むといふことは、「変わる」ことである。

人と人、国と国が和解し融和する鍵は、この「変わる」という過程に秘められてあるといふのである。



コーMRA世界大会へのご案内

(スイス 1985 7/13~9/1)

テーマ

「緊迫した世界にともす希望の灯」

- | | |
|---------------------------|----------------------------------|
| 7/13~14 開会式 | 8/7~14 アジア、アメリカ、ヨーロッパ (アジアセッション) |
| 7/13~20 青年のための会議 | 8/17~25 アフリカ、アフリカとヨーロッパの対話 |
| 7/19~21 病める世界における医療関係者の役割 | 8/27~9/1 人と経済 (産業人会議) |
| 7/25~8/2 ファミリーセッション | |

社国際MRA日本協会では、アジアセッション(8/7~8/14)参加者のためのグループ・ツアーを募集しています。8月7日出発(スイス航空)と8月9日出発(フランス航空)の2グループで約10日間、東京・大阪どちらからでも参加できます(先着20名) お問い合わせは事務局まで

心に残る言葉

神に対しては炎の心で(熱烈に)
人に対しては愛の心で(やさしく)
自己に対しては鉄の心で(きびしく)

聖オーガスチン

三五四~四二〇

●事務局近況●

◇英国に一時帰国していたクレイグさん一家は、四月四日に、再び日本の地を踏まれました。生後四ヶ月のリチャード君も一緒です。フイリップ君(四才)のみごとなクインズ・イングリッシュに一同ためいき……田端のハウスをきりもりして下さる小門さん、帰ってくるなり「チーズ・オン・トースト」をほしがったフイリップちゃんに再び「のりごはん」の世界を思い出してもらおうと現在奮闘中。幼稚園に行き始めたら、日本語もまた覚えてくれることでしょう。

◇夏にスイスのコーで開かれる国際会議を皮切りに、MRA研修の旅に出る予定の北口尚子さん(二十才)が、学校卒業と同時に事務局に通い始めてくれています。フランス語は、クレイグ夫人とこの方にオマカセ!

◇「読みやすく、とっつきやすい機関誌を!」とめざして苦闘した結果が今回お届けしたIMAJです。よりよいものをつくるために皆さまのご意見やご感想をお待ちしております。